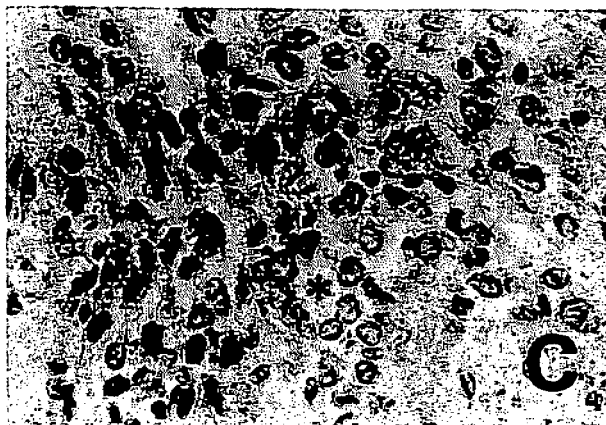
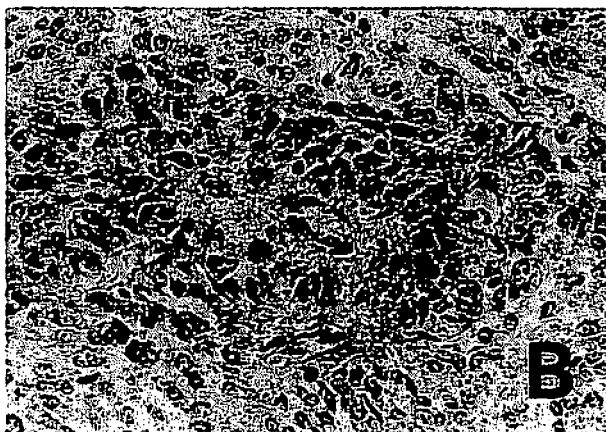
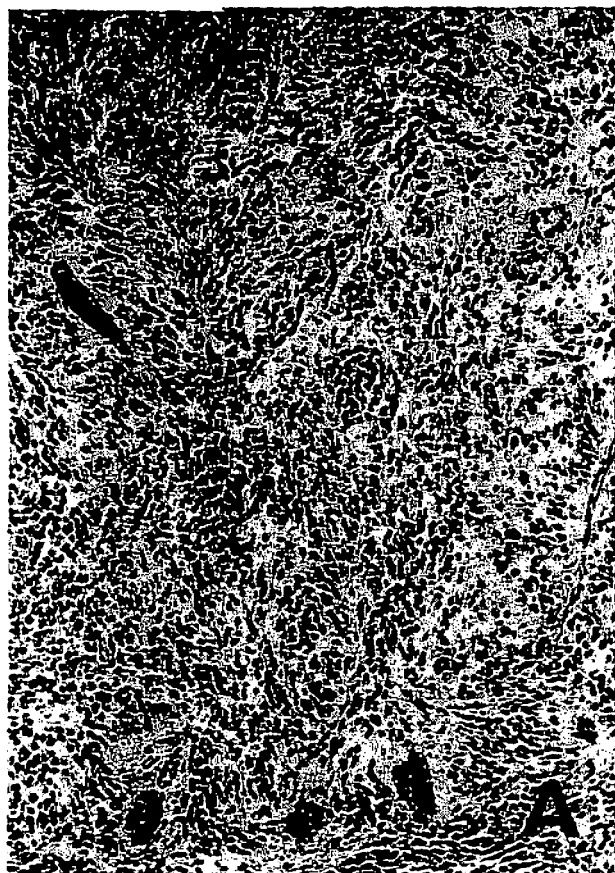


# イヌの小脳

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第24回獣医病理学研修会標本No.422



動物：ダックスフンド，雄，12歳6ヶ月。

臨床：1980年12月頃から前肢がふらつき，1981年2月下旬には斜頸（左側），同側へしばしば転倒，X線検索で椎間板ヘルニアを疑う所見があった。ステロイド高投与量により症状は一時改善されたが，低用量に移行したところ再発，起立不能となる。3月14日ショック状態となり，死亡。

剖検所見：側脳室は拡張し，小脳左半球に径15mmの小脳溝消失部，軟化巣を認め，病巣辺縁に出血をともなっていた。ホルマリン固定後の検討で，旁片葉前部に大豆大の腫瘤が膨出し，虫部・係蹄小葉・片葉とは境界明瞭であった。腫瘤の第四脳室との連絡，硬膜との癒着は認められなかった。

組織所見：腫瘤周囲には広汎な出血があり，周囲正常組織は圧迫萎縮におちいり，病変部との境界は明瞭であった。腫瘤は細胞に富み，構成細胞は多形性で，核・細胞質ともに大小不同，巨大核を持つ細胞や多核細胞も散見され，有糸分裂像が多数認められた（写真A，H E，×300）。結合織は辺縁にわずかに認められた。

一部，血管に富む部分があり，血管を囲んで，紡錘形

細胞が求心性にpseudorosette配列を示していた（写真B，H E，×700）。密在する腫瘍細胞群中には管腔を形成しないpseudorosette構造も見出された（写真C，\*印，H E，×1300）。明るい類円形核，明瞭な核仁を持つ比較的大型の腫瘍細胞もみられ，これらの細胞およびより小型細胞の若干はNissl染色で陽性を示した。紡錘形細胞の増殖部では，MalloryのPTAH法あるいはHolzer法で神経膠線維を証明できなかった。

また，くも膜下腔に沿って腫瘍細胞の浸潤がみられたが，硬膜下への浸潤はなかった。電顕所見では，腫瘍細胞表面には多くの突起があり，細胞質は粗面小胞体に富み，glialfilamentを欠いていた。核は複雑な陥凹を示した。

診断：腫瘍部と健常部との境界が明瞭で発生部位が小脳半球であること，腫瘍細胞が一部Nissl染色陽性でありpseudorosette配列を示すこと，くも膜下への浸潤が認められることなどから，髄芽腫medulloblastomaと診断した。しかし一方では，老齢犬であること，細胞の多形性，豊富な血管，出血，囲管性のpseudorosette構築など問題とすべき所見も多かった。